大阪産業大学綜合図書館報

2004
No.15

図書館だより

目　次

■図書館は「宇宙」の中心 ……1
■図書館ホームページ～使いこなして図書館ツウに～ ……2
■図書館に無い本も読みたい!～図書館の使い方シリーズNo.12～ ……4
■学生選書モニター（平成16年度第2回） ……6
■新着DVD紹介 ……7
■INFORMATION ……8

図書館は「宇宙」の中心

綜合図書館委員　人間環境学部教授　手島　勲矢

本来、大学にとって図書館の重要性は自明であり、改めて、強調しなければいけない話ではない。しかし、最近の少子化の傾向をうけて学校運営を見直す多くの日本の大学においては別である。全入時代を数年後にひかえて、大学自治の体質は、組織全体の生き残りをかけ利潤を追求する会社経営の体質とさほど変わらなくなってきている。今では、学生数の確保のためにあの手この手の奇策・珍説もめずらしくない。だが、言わずもがな、無駄な支出の削減に努めることは、何よりも運営改善の核心であろう。しかしながら、問題は、大学における「無駄」な支出とは何か、また大学の「魅力」とは何かである。

その昔、図書館は宇宙の中心であった。つまり、知識の空間としての「大学」（ユニバーシティ）という名称が「宇宙」（ユニバース）の字義に由来することは有名であるが、その宇宙たる「大学」の中心は、まさに一つの図書館にあったと言っていい。いや、図書館という発想そのものが、大学の精神そのものであった。私は、図書館の起源としてよく引用される、紀元前3世紀エジプトのアレクサンドリアに設けられた「ムセイオン」の成り立ちを思い出しながら、そう考えてしまう。

いくつかの点で、アレクサンドリアにプトレマイオス王朝が設けた図書館（ムセイオン）は、それまでのメソポタミアに見られる王宮付属の記録保管所（アーカイブ）とは性格を異にする。その違いの一つは、保管される記録の中身である。メソポタミアの記録保管所で発見される文書群の主体は、納税に関する役所の公文書や裁判所の判決文など、現実生活の重要な記録である。これらは実用的で政治的な価値を有する文書群だが、それに対して、アレクサンドリア図書館の中身は、歴史を知るのに、また世界を考えるのに、有益なテキスト群であった。これは、図書館設立の動機の一つが王朝の子弟たちにギリシア的教養を与えることにあったことが関係している。つまり図書館を建てるに際し、まずプトレマイオス1世が行ったのは、ゼノドトスという当時の古典的なギリシアの学識を代表する学者をアレクサンドリアの図書館長として招聘したことである（前308年）。このゼノドトスは、ホメロス叙事詩テキストの校訂に着手した古典学者としても有名である。そして、以来、様々な優れた学者がこのアレクサンドリアの図書館に集まり始めた。この様を、フィリウスのティモンは、「書物の人々たちはエジプトで養われ、久しく、図書館の檻の中に閉じ込められて」と揶揄している。

この歴史が教えるのは、様々な書物を収める図書館があるから様々な学者が集まるようになったのではなく、実は、様々な「めずらしい」「この世離れした」学者が集まるからこそ、そこに様々な書物も集まったということである。いや、そればかりか、実用的でないゆえに、失われようとしていた様々な古典的な文書（ホメロスから聖書まで）も、これらの学者たちは残すべく注解する努力をした。だから、ホメロスのギリシア語も旧約聖書のヘブライ語も意味不明になることなく、現在でも、私たちに伝えられている。そして、さらに、カリマコス、エラトスセネス、アリストファネス、アリスタルコスなど、代々のアレクサンドリア図書館長たちは、テキストを超えて、世界と人間に対する実利を度外視した人文的な関心を抱き続けた。それゆえに、アレクサンドリアでは天文学も数学も工学も、同時に飛躍的な発展を遂げた――というのは、「図書館」の理想化もはなはだしいであろうか。

いずれにせよ、私たちの時代は、今、大事な人類精神の分岐点に立たされていると思う。すべてを見渡すことは、誰にもできないが、ただ純粋に学問を志す一人ひとりの心に映る「大事なもの」は、いつの時代においても「大事なもの」であろうと私は信じたい。そして、そのような、様々な「大事なもの」を心に抱き続ける学者の集まりこそが、「図書館」（ムセイオン）つまり「宇宙」（ユニバース）を構成するのではなかろうか。私は、昨今の改革の嵐の中で、日本の「大学」（ユニバーシティ）から「図書館」が失われないよう念じている。

題字：企画開発室長　梅本　白蓮